



10月幼稚園だより

令和7年10月2日
千代田区立番町幼稚園
園長 美越 英宣



つながりを大切にした保育

副園長 荒木 久子



幼稚園HP

9月1日の始業式からスタートした2学期。どの子にとっても、学級のみんなで過ごすのは7月の終業式以来でした。「久しぶりでドキドキしているかな」「園生活のリズムを少しずつ思い出せるようにしていこう」・・・そんな教師の予想や心構えとは裏腹に、緊張した面持ちで過ごす姿は始業式の日くらいで、子どもたちは瞬く間にそれぞれの「いつもどおり」を取り戻し、いきいきと園生活を送り始めました。その姿からは、一学期の生活や経験の“つながり”、友達や教師との“つながり”、思いや気持ちの“つながり”が確実にそこにあることを感じさせられました。

この“つながり”は、本園の教育においても、そして、幼児教育においても大切にしていることの一つです。

先日、特色ある教育活動の一環として、東雲打楽器二重奏の方をお招きし「リズムでこんにちは パーカッションの世界」と題したミニコンサートを全園児で鑑賞しました。コンサート中は、マリンバなどのパーカッションをはじめとし、身近なフライパンやボウルなど、様々な音が奏でるリズムやメロディーを間近で鑑賞し、子どもたちは全身でリズムに乗ったり、一緒に歌ったり踊ったりして楽しみました。しかし、番町幼稚園ではこうした体験を「その日限りの特別な出来事」で完結とはしません。そこで感じた感動や楽しさ、共有した体験を、いかに翌日以降の保育につなげていくか、それが私たち教師の腕の見せどころでもあります。子どもたちの遊びや興味・関心、これまでの経験とどう結びつけていくかを、教師はコンサート中子どもたちと楽しみながらも頭をフル稼働させ、保育後には教師間で環境構成や仕掛けについて相談します。翌日以降、各保育室では次のような姿が見られました。

3歳児・もも組

カスタネットなど、すぐに扱える楽器を環境として提示し興味をもった子が鳴らし始めました。傍らで教師が空き箱で手作りの太鼓を楽しそうに鳴らし、その姿がモデルとなって、2・3人の子どもたちが自分の太鼓を作り始めました。ここですかさず教師が出した低い台が舞台に変身し、誇らしげに太鼓やカスタネットを鳴らしながらセッションを楽しむ姿があり、昨日の経験と友達とのつながりが自然に生まれるもも組でした。

4歳児・さくら組

片付けを終えて学級全体で集まる場面では、「楽器deクイズ!？」が始まりました。「Aちゃんの好きな動物は何でしょう？」という教師の問いに、Aちゃんはタンバリンで「♪♪♪」とリズムで答えます。それを聞いた友達が「♪う♪さ♪ぎかな?」「それとも♪た♪ぬ♪きかな?」と、音と文字を結びつけて考え答えます。好きな遊びの中でも楽器を鳴らす経験と並行しながら、音や楽器への親しみが更に広がるさくら組でした。

5歳児・うめ組

登園すると、木琴が環境として提示されていました。興味をもった子どもたちが次々と音を鳴らし、知っている曲を弾いてみる姿もありました。ある子は「電車のホームで流れる発車メロディーを木琴で弾いてみたい」と、自分の好きなものと音楽をつなげて遊びに取り入れました。楽譜はありません。そこで教師と一緒にタブレットでメロディーを聴き、音を探りながら「何か違うな～」「こうじゃない?」と試行錯誤し、教師の手も借りながら、「やってみたい」という思いを実現し、音や楽器の楽しさや可能性がさらに深まるうめ組でした。



これらように、番町幼稚園では、子どもたちの経験とこれから、人との関係など、様々な“つながり”を大切にしながら保育を組み立てています。つながるからこそ、遊びや学びは広がり、膨らみ、深まり、そのプロセスの中で多くの「探究」が生まれます。たくさんの“つながり”と探究を教師と子どもたちで紡いでいく舞台、番町幼稚園となる「充実の秋」となるよう教職員一同の“つながり”も更に深めていきます。